

第三十四回 その後の北伐 ― 『三国志演義』でのあらすじと解説

第二次く第六次北伐

①第二次北伐

第一次北伐の失敗の後、同年二二八年（建興六年）の冬には、もう第二次北伐がはじまります。

その直前、趙雲ちよううん死去の知らせが届きます。諸葛亮は、わたしは片腕をもがれてしまった、と嘆き悲しみます。劉禪もまた、趙雲がいなければ私は幼少のころ乱戦のうちに殺されていただろうと感に堪えず、趙雲に大將軍を追贈し順平侯じゆんへいこうの諡号しごうを与えます。

諡号は生前の事蹟じせきに鑑みかんが追贈ついぞうされる名で、順は、「柔順・賢明・慈愛・恩恵おんけいを有する者」、平は「仕事をするのに秩序がある者」「災禍・動乱を平定すること」を称する言葉です（『三国志』注の趙雲別伝）。

豪胆にして細心、責任感が強く、道理を重んじた趙雲にピッタリな称号です。

第二次北伐について、歴史書『三国志』は、簡単に以下のように書くだけです。

「（建興六年）冬、（諸葛）亮、復た散関さんかんを出で、陳倉ちんそうを囲む。曹真之れを拒むはは」（諸葛亮伝）。

この短い記述を、『三国志演義』はフィクションで大きく膨らませます。

散関から陳倉へも、山岳が重畳ちようじようと連なる秦嶺山脈の間道かんどうを行かねばなりません。成都から漢中、漢中から散関、散関から陳倉へ、Google Mapで調べると約七七〇キロの道のりです。獲得標高は四十九キロになります。新幹線でおよそ東京・広島間の距離になります。諸葛亮はこの北伐を、死に至るまでの六年間に六回も行おうわけですから、北伐にかける諸葛亮の熱意なまはんかが生半可なものではないことがわかります。

以下、『三国志演義』で、あらすじでまとめます。

諸葛亮は、劉禪に「後出師の表」ごしを奉ります。「後出師の表」は、まず、自分が劉備から漢室復興の大業を託されたことを述べ、しかし現在、魏はあまりにも強大で、一方蜀はあまりにも弱く、このままでは蜀は魏に滅ぼされてしまう、今坐ざして滅亡を待つよりは、魏討伐とうばつに打って出るべきであると述べ、最後を有名な「鞠躬尽瘁きくきゆうじんすいし、死してのち已やむ（鞠躬尽瘁、死而後已）」の言葉で締めくくります。

建興六年冬（二二八年）、諸葛亮はこの上表文を劉禪に捧げると、第二次北伐に出発します。今回は、散関から秦嶺山脈を越え、陳倉を攻撃します。陳倉は魏の將郝昭かくしやうが固く守っていました。

まず諸葛亮は、「雲梯」(攻城兵器)百台を使って攻めます。しかし、雲梯が城壁にちかづくとき城から火矢が発射されて、雲梯は燃え上がってしまいました。

こんどは「衝車」(車の先に大きな鉄をつけ、突きあてて城壁を破壊する)を繰りだします。しかし、郝昭は、大きな石を投げて衝車を打ちくだきます。

そこで、諸葛亮は坑道を掘って城の下まで通そうとしますが、郝昭は堀をめぐらせて坑道を切断します。こうして、さすがの諸葛亮も攻めあぐねてしまいます。

そこへ、魏の大将王双の援軍がやってきました。

諸葛亮は姜維に策はないかと相談すると、姜維は陳倉は堅固で攻め取れないから、斜谷からでて祁山を襲うよう提案します。

(※ここで、諸葛亮が斜谷から祁山にすることにしていますが、斜谷と祁山は秦嶺山脈の東と西に遥かに離れているので、これは実際にはあり得ないことです。いつも通り、『三国志演義』は地理的位置関係については無頓着です。)

姜維は、魏の総大将曹真に手紙を送り、偽って寝返ると伝えます。それを真に受けた曹真は五万の兵を斜谷へ向かわせませんが、途中、諸葛亮が待ち伏せをしていて、魏軍を敗走させます。そして、諸葛亮はそのまま祁山のふもとまで進出して陣をかまえます。

ここで、曹叡（魏の第二代皇帝）から対策を問われた司馬懿は、守りを固めて持久戦に持ち込み、蜀軍の食糧が尽きるのを待てばよいと献策します。

そして、司馬懿の読み通り、食糧が尽きた蜀軍は漢中へ引き上げていきます。王双はこれを追撃しますが、途中、魏延によつて切り殺されてしまいます。

以上が『三国志演義』の第二次北伐のあらすじですが、内容はほとんどがフィクションです。

また、『三国志演義』では「六出祁山（六たび祁山に出ず）」として、諸葛亮がすべての北伐において祁山に出撃していますが、実際に祁山に行くのは二度だけです。この第二次北伐でも祁山には出向いていません。

②第三次北伐

続いて建興七年（二二九年）、席の温まる間もなく第三次北伐がはじまります。

陳倉を守る魏の郝昭が重病におちいると、それを聞いた諸葛亮は陳倉を急襲してこれを奪います。そして、そこからまた祁山に軍を進めます。曹叡は、司馬懿を総大将に任命します。諸葛亮は祁山に布陣して魏軍を待ち受けます。そこへ司馬懿が十万の兵を率いてやって来

ます。

諸葛亮は、部将陳式ちんしきを派遣して武都・陰平いんぺいを攻め取らせませす。司馬懿は、その隙すきに張郃に諸葛亮の本陣を攻撃させませす、反対に張郃は蜀軍に囲まれてしまい、奮戦してなんとか重圍を突破します。司馬懿はそれからは守りを固めて、打つて出ようとはしませんでした。

諸葛亮は、司馬懿が戦おうとしないので、そのまま漢中へ引きあげていきます。

司馬懿は、蜀軍が引き上げたを見ると張郃に追撃させませす、張郃は伏兵にあって大敗きつを喫くします。しかしこの時、張飛の息子張苞ちようほうが亡くなったとの知らせが届くと、諸葛亮はシヨツクのあまり血を吐いて倒れてしまい、成都にもどつて養生することになりました。

③第四次北伐

建興八年（二三〇年）、今度は魏が蜀を攻撃します。これは、諸葛亮が受けて立つ側になりますので、北伐に含めるか含めないかで、北伐を五回とするか六回にするかが別れます。

司馬懿は漢中を奪おうと、劍閣けんかくへ兵を進めます。これに対し諸葛亮が応じ、二人は川を挟んで向かい合い、互いの「陣立じんだて」を競きそう勝負をはじめませす。司馬懿は「混元こんげん一いつの陣」、諸葛亮は「八卦はっけの陣」です。この勝負は、諸葛亮が勝利を収め、諸葛亮はまたまた祁山きざんに向か

います。

ここで、蜀軍の食糧輸送にあたっていた苟安が、期日に十日も遅れるという失敗をしでかし、諸葛亮の怒りを買って杖刑に処せられ、それを怨んで魏に降ります。

司馬懿は、苟安に成都でデマを拡散するように命じます。そのデマは、諸葛亮が帝位を乗っ取るうとしている、というものです。

これは功を奏し、宮中の宦官が劉禪の耳に入れます。そして、劉禪は諸葛亮に至急戻らうに伝えます。

諸葛亮は、主君の命には従わぬわけにはいかない、司馬懿の追撃を防ぐ策をめぐらせたうえで、成都へ戻っていきます。その策とは、退却しつつ毎日かまどの数を倍に増やしていくというものです。はたして司馬懿は、毎日かまどの数が倍になるのを見て驚き、追撃を諦めました。後でだまされたとわかった司馬懿は、諸葛亮の智謀にはとてもかなわないと嘆息します。

諸葛亮が成都に帰った時には、デマをふりまいた苟安はすでに魏へ逃亡したあとでした。ここの内容は、すべて『三国志演義』のフィクションです。

④第五次北伐

翌年の建興九年（二三一年）、第五次北伐が始まります。史実では、ここから諸葛亮と司馬懿の戦いがはじまります。

司馬懿は、大軍をひきいて渭水いすいに進出しますが、この時すでに、諸葛亮は祁山に進出していました。史実では、諸葛亮はこの時祁山には行っていない。

蜀軍は兵糧が不足していたので、諸葛亮は熟した麦じゆくを刈りとらせようとしますが、魏軍が蜀軍に刈りとらせないように守っていました。そこで諸葛亮は一計を案じます。

彼が使っている四輪車と同じものを三台作り、諸葛亮は、その一台に頭に簪冠さんかん（かんざしで留めた冠）、鶴なえ（不吉で無気味な鳥とされる）の羽衣はじろもを着し、手に羽扇うせんをもって乗り込み、髪をふりみだした黒衣こくいのお供をしたがえ、魏軍に向かって進みます。

司馬懿が諸葛亮を捕らえろと命じると、諸葛亮は車をとって返し、魏軍が追いかけて来ると、不気味な風が吹き、霧が立ち込めます。そして、追いかけても追いかけても追いつけません。目の前に見えています。どうしても追いつけないのです。

魏の兵が立ちどまると、諸葛亮は振り返って休みます。そして再び追いかけると、また立ち去っていきます。司馬懿が、あれは「縮地の法（地面を縮めて瞬間移動する）」だと言って

退こうとすると、今度は左手から諸葛亮が現れます。見ると、お供は剣を手に、みだれ髪・黒衣・素足で四輪車を囲み、車上には簪冠さんかんを頭に鶴の羽衣を着た諸葛亮が、羽扇を手に座っています。

「さきほどの車にも座っていて、ここにもまたいるのか」と驚くと、右手からも、同じ格好の諸葛亮が進んで来ます。

魏軍はあつと驚いて逃げ去りますが、途中、またもや諸葛亮が同じ格好で現れると、司馬懿も兵士もみなびっくり仰天して逃げさっていきます。そして、蜀軍はゆうゆうと麦を刈りとって引き上げていきます。諸葛亮はまるで魔法使いのようです。

ちょうどその時、李厳りげんから呉と魏が手を結んだとの知らせが届き、諸葛亮は驚いて漢中に引き上げます。張郃ちやうたうはこれを追撃しますが、蜀軍の伏兵によって射殺されてしまいます。張郃は魏の歴戦の勇将でしたので、司馬懿や曹叅は悲嘆にくれます。

さて、諸葛亮が漢中に引きあげると、李厳は劉禪にいつわり報告をします。自分は食糧の準備をして諸葛亮のもとへ運ぼうとしていたのに、諸葛亮は勝手に帰って来たと言うのです。これを聞いた諸葛亮は驚きます。呉が魏と手を結んだといって諸葛亮を呼び戻したのは、他ならぬ李厳りげんだったからです。調べてみると、李厳が、自分の役目である食糧運搬が期日に間

にあわないため、偽りの報告をして自分の過ちを隠そうとしたことがわかります。諸葛亮は、李嚴が劉備以来の重臣であることから、官職をとりあげるにとどめます。

※『三国志』李嚴伝によれば、漢中にもどった諸葛亮は、李嚴の責任を追及し、その官位を剥奪して庶民に落とし、梓潼郡に流します。一方で、息子の李豊に父を励ますよう、涙を流しながら声をかけます。李嚴は、きびしい処分にもかかわらず、やがて諸葛亮が自分を復活させてくれるものと信じて待ちます。しかし、この後、諸葛亮が五丈原で亡くなると、痛憤して自分も病氣となって亡くなります。李嚴は諸葛亮を怨むのではなく、諸葛亮の公平な態度を信頼していました。諸葛亮の厳格な法治主義は、部下を納得させる合理性につらぬかれていたことがわかります。

⑤第六次北伐 — 木牛と流馬

そして三年の歳月が流れます。建興十三年（二三四年）春二月、諸葛亮は祁山に出陣します。一方、司馬懿は、長安に四十万の軍を集めてこれに備えます。

ある日、諸葛亮は渭水の地形を調べていて、千人あまりを収容できる人目につかない谷を

見つけます。それは、葫蘆谷（ひようたんぐ）と呼ばれていました。そこで、蜀から連れてきた大工たちを葫蘆谷の中へ入れ、ひそかに「木牛」「流馬」という新型輸送機を作らせませす。これで常につきまとう兵糧輸送の困難を解決しようとしませす。

これを知った司馬懿は、教頭の木牛・流馬を奪い取って来させませす。それは、生き物のように動いたのでビックリさせませす。司馬懿はすぐに原物どおりに木牛・流馬を作らせ、魏軍もそれを使つて兵糧を輸送させませす。

これを聞いた諸葛亮は、「わしはこれ待っていた」と喜びませす。

それから数日後、諸葛亮は、魏軍が兵糧を運んでいることを聞くと、蜀の兵士を輸送隊に紛れこませ、木牛・流馬の舌を回させませす。すると、木牛・流馬は動かなくなつてしまひませす。魏の輸送隊が途方にくれていると、そこへ蜀軍が押し寄せて輸送隊から木牛・流馬を奪い取り、牛馬の舌を元のようにねじつて動くようにさせると、そのまま兵糧を奪つて引き上げていきます。

ついで、司馬懿は、蜀の降伏兵から諸葛亮が葫蘆谷にいて、毎日兵糧を運んでいることを聞き出すと、葫蘆谷を襲つて蜀軍の兵糧を焼きはらおうと考えませす。司馬懿は一軍を祁山の本陣へ差し向けて蜀軍の注意をそらし、その隙に葫蘆谷を襲おうとさせませす。司馬懿が葫蘆谷

に向かうと、葫蘆谷の入り口には魏延ぎえんが待ちかまえていて、司馬懿やって来るのを見ると、谷の中へ逃げこんでいきます。

司馬懿が谷の中を探らせると、中には兵糧の貯蔵小屋が立ち並んでいます。司馬懿が中へ入って見ると、小屋には乾いたたきぎか積んであるだけでした。その時、山の上から松明たいまつがいつせいに投げおろされ、小屋のたきぎがどつと燃えあがります。

司馬懿は呆然ほうぜんじしつ自失となり、「我らは、みなここで死ぬのか」と大声あげて泣き出します。

するとそのとき、にわかこくうんに黒雲がたちこめ、大雨が降りそそぎます。火の海はたちまち消え、司馬懿は兵を率いてかろうじて逃げ去ることができました。

諸葛亮は、司馬懿が逃れたと聞くと、天を仰あおいで「事を謀はかるは人に在り、事を成なすは天に在り」と嘆息たんそくします。

木牛・流馬については、『三国志』の注「諸葛亮集」に長い記述がありますが、「牛は二本のかじ棒にすぎり、人が六尺進むと、牛は四歩歩く。一年分の食糧を積んで、日に二十里走り、人手はそんなにいらぬ」など、読んでいてもあまりよくわかりません。しかし、諸葛亮が人手ひとでのかからない新型運搬機を開発したことは確かです。